

中橋

現在、旭区には下記の橋が架かっている。

橋名	架橋年	河川名	管理
赤川仮橋	昭和4年 (1929)	淀川	大阪市
豊里大橋	昭和45年 (1970)	〃	〃
豊里大橋 左岸取付高架橋	昭和45年 (1970)	道路	〃
菅原城北大橋	平成元年 (1989)	淀川	〃
菅原城北大橋 左岸取付高架橋	平成元年 (1989)	道路	〃
西浪橋	平成8年 (1996)	城北川	〃
香蘭橋	昭和36年 (1961)	〃	〃
西中宮橋	昭和42年 (1967)	〃	〃
東中宮橋	昭和40年 (1965)	〃	〃
旭江野橋	昭和51年 (1976)	〃	〃
西大宮橋	昭和36年 (1961)	〃	〃
東大宮橋	昭和26年 (1951)	〃	〃
大宮小橋	昭和39年 (1964)	〃	〃
古市橋	昭和12年 (1937)	〃	〃
新森小路橋	昭和12年 (1937)	〃	〃
新森小橋	平成7年 (1995)	〃	〃
中橋	大正3年 (1914)	大宮東南 内代水路	〃
大宮西2号線	昭和4年 (1929)	〃	〃
菟橋	昭和37年 (1962)	城北川	国土交通省
城北橋	昭和54年 (1979)	〃	〃

表■旭区に架かっている橋（平成21年(2009)現在）

最も古い橋として残っているのが大正3年(1914)に架けられた『中橋』である。高殿4丁目1の大宮東南内代水路という、今は水のないところに現存している。

長さ3.9メートル、幅1.4メートルの石版橋である。親柱が3本残っていて、「中橋・大正3年6月・なかはし」と刻まれている。

旭区では他に、統一樋管水路に架かっていた大和橋、三郷水路に架かっていた両国橋の親柱が残っている。

大正3年(1914)、旭区はまだ大阪市に属さない東成郡であり、農村地帯であった。大正14年(1925)、旭区は大阪市に編入され、昭和に入ると土地区画整理事業が急速に進められ、住宅地・工業地帯へと変貌を遂げていった。

中橋は、こうした時代の流れを過ごしてきた、記念碑的な橋である。



写真■中橋



写真■現存する中橋の親柱



図■昭和9年(1934)の中橋

資料提供：大阪市史編集所



図■現在の中橋

赤川鉄橋

子どもの頃から自転車で通ることのできた「赤川の鉄橋」は正式の名前を「淀川橋梁」といい、東海道線の支線、城東貨物線の都島信号所と吹田信号所の間に位置している。

城東貨物線は大阪市内を通る城東線の貨物専用別線として、昭和4年(1929)3月15日に開通し、複線として計画されたが、単線で開業しそのまま運行した。その後更に南下し、阪和線の杉本町までを阪和貨物線として貨物輸送を行っていた。

赤川鉄橋は、複線の下路ワーレントラス橋として建設された。橋桁は支間33メートルのものが18連架けられている。桁は汽車製造kkと川崎造船kkで9連ずつ作られた国産である。

当時、建設工事を直接担当された鉄道技師椋本修三氏の口述された記録がある。

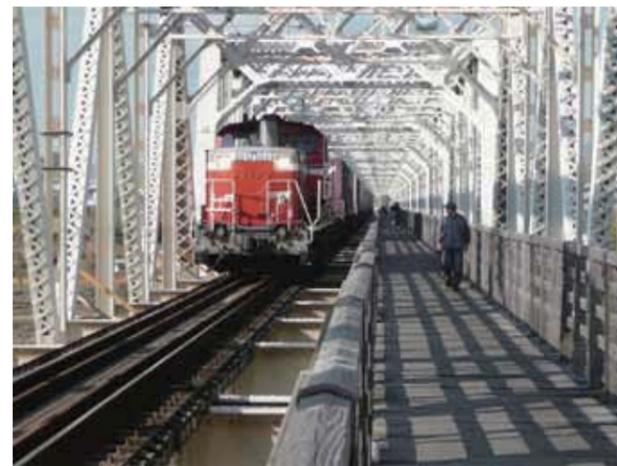
「城東線（今の環状線）は当時貨物列車も運行していました。いずれ混雑が予想されることから、旅客と貨物を分離する必要がありました。その際複々線にするには、市街地でもあり費用が莫大であることから、別線で市の東郊外の線路が選定されました。」これが今の城東貨物線である。

淀川橋梁は、この工事で最も工期のかかることが予想され、いち早く着工、橋脚の基礎工事には当時としては先進的な機械力が使用された。

鉄橋は重要河川である淀川を直角に横断するよう、線路方向が決められた。そのため当時の国道1号（その頃は京阪電車線が併行していた。今の都島通り）との交差点で半径1,006メートルの大きなカーブでやや東に向き、直角に淀川を渡ってすぐ亀岡街道との交差点手前で半径503メートルのカーブで西に方向を戻している。

この線路は将来の市街地化を予想して、高架線にすることにしたが、まだ用地費が安いことから、盛り土で構築することが原則であった。鉄橋の旭区側の盛り土には、当時河川改修工事中だったことから、そこで発生した土砂を利用することにして内務省（国土交通省）に委託して工事が進められた。

「左岸から、放出までは当時は水田地帯で『クリーク』が縦横にあり測量の時に『クリーク』を渡るため大回りをするなど困ったことや、地質も悪く盛り土などの沈下対策が大変でありました。」この記録で当時の赤川・城北地区の様子を知ることができる。



写真■赤川鉄橋



写真■赤川鉄橋親柱